昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十四年十一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二四六号）

慈光

第二十一巻　第十一号

近角常観先生特揖号

目次

63.7.27

一実の大道……近角常観……(1)
近角常観の生涯……木村雄吉……(16)
近角常観・常音先生随聞記……柳瀬留治……(19)

一実の大道

近角常観

一、他力に対する世間の誤解

解親鸞聖人の『和讃』に

万行諸善の小路より
本願一実の大道に
帰入しぬれば涅槃の
さとりはすなわちひらくなり

今ここに話さんとする趣意は、我々この人生にありて、真に救わるべき道は、この本願一実の大道あるのみである、外にあることなしとの意味である。

なおすこしく際立てて申しのべるに、今日世間に行われている思想においても、仏教には自力、他力の二門がある。自力の自ら悟る道もあれば、他力のただ信仰で行く道もある。けれども、中で他力は行き易く、自力はかくかくと、二道あるように考えるが、今日世間普通の考え方である。しかのみならず、仏教自身においても、先ずはじめに、難行道（なんぎょうどう）、易行道（いぎょうどう）と、むつかしいのと、易いのとがあるというように、二つならべて書いてある。しかも何れが重くなってあるかというに、これは文字上より来るなるも、

昼夜精進の心あるものは難行道を行くが普通である。けれども儕弱怯劣（にょうじゃくこれつ）の輩は、ここに易行道があるからこれを行けと、

文章上にもそうあらわれてある。むしろ大いに修行して行くべきが当然にて、しかしそれが出来ぬ者のためには、ここに変則の道があると、書いてあるかとまでに疑う程にある。

故に易行の他力は弱き者のために存することとなり、二つあるけれど、難行道の方が順当で、易行道は特別の場合のために設けられた変則の道であるかに見える。

又世間の上からいうもこのように考えられ「人間は努力が肝腎である」――この努力を自力とのみ理解してはいかぬところもあるも――「自らのことは自から働いて、自から始末する」人の力を借るのは感服せぬことになっている。

故に、他力は気の弱き、卑屈な、人の力をあてにしたおしえのように人が聞いて、これは、今日の社会に他力が徹せぬところがあるのも、一つにはこれがあるからである。ゆえに、普通としては、自力がまずあたりまえであると、一般に考えるところと思うのである。

二、自力聖道は仮門なり

然るに他力の意義がいちじるしくあらわれてきて、親鸞聖人になれば、次の和讃がある。

聖道権化（ごんけ）の方便に
衆生ひさしくとどまりて
諸有（しょう）に流転の身とぞなる
悲願の一乗帰命せよ

遠まわしの私の言葉でいうよりも、聖人の言葉で云う聖道の自力雑行の道は、権化方便の道にして、これ真の道にあらず、仮の道である。我々が自己の力をたのみとして自力で行くとなれば、かく、仮りにそれでつれこまれるだけで、これ真実の大道でないと。二道ならべて書いてないくらいのことにあらず、難行自力の道は、これ権化方便の道にして、それでは真に到れることなく、又、足地を踏む人間が、自らの力で仏になり、聖者に到るなど、あり得ぬことであると。しかるに、衆生久しくそれにとどまりて、「諸有に流転の身とぞなる」――今日我々が今に罪をつくりて放浪するのは、その気が無いからか。否、やる気で明日からは〳〵で、それでいつまでも自力聖道にとどまりて流転を続けて居るものである。ゆえに、その如き道があるのでない、ここに悲願の一乗があるだけであるから、すべての人々がこれに帰して、この道に救われよと。

これが聖人が「本願一実の大道」とか「本願円頓一乗」とか、かくこの外に道なるものの存在がないと、思い切って断言せられたところである。しかもそれをそういう一種の法門沙汰で云うのでは無意味であるから、それを我々の内面的実験、信仰上の経験として「如何にもその大道があるばかりであった、如何にも偉大なる大道に出してもらった」と、そこになる味わいを語らんとするのが話の趣意である。

三、私の話は両面に出る

ところで私の話は常に二岐に錯綜（さくそう）する。それは私のを読み、書きして下さる方の向きに二類があるからである。たとえば右より来られると、左から来られると、立場を異にして来られるから、そのために、一方には「そんなに行ってはいかぬ、こちらだ」と云わねばならぬし、一方には「こちらでない、そちらだ」と云わなくてはならぬ。それが右か左か分り難いようになるのであるが、

これは必要やむを得ぬ。今この「本願一実の大道」の話にしても、現代の人には「それは著しいことである、人間は自ら努めて到らねばならぬが原則であるのに、他力が絶対の大道とは、それは耳寄り」と思われようし、又今まで他力を聞きなれて居られる方の中には「なに、そんなことをこと珍らしく」と思われる方もあろうというものである。そのかわり青年諸君の中などには「人間は自から働いて行くべきに、他の力でなどけしからぬ」と思われる方もあるかも知れぬ。このように聞いて下さる方に二類があるから、私の話もどうしても両面に出る。しかしそれは注意すれば聞き分けは出来るのだから、どうぞ今まで聞きつけの人は、私の云うのを然り〳〵と賛成する方にのみ聞かず、私の言には、皆様の思うていらるる真宗とは、チト違うところのあるのに気をつけられたいし、又青年諸君が各自の思想を尊重せらるるも結構であるも、その思いが思うように行かぬと申す方に気をつけて貰いたいものである。

四、文類正信偈

そこですこし話が専門にわたるが、平日御同ようが拝誦しているところの『正信偈』である。これは聖人が『教行信証』を作られた時に「行巻」の終りに書かれた偈文である。「偈は己心をのぶる」とあって、日本の歌、西洋の詩と同様に、偈は自身の情（こころ）をのべられたものである。数ある偈文、いずれも重要であるが、殊に聖人の『正信念仏偈』はわけて大切なことになって居る。これは聖人五十二の時に書かれたものであるが、猶一つ、晩年七十三歳の時書かれた『正信偈』がある。それは七十三歳の時、聖人『略文類』を作られて、つまり教行信証を略し、つずめたものである。長い教行信証が、それには僅か十七枚程になっていて、勿論両方ともに文類ではあるけれど、特にこの方に『浄土文類聚鈔』ということになっている。この中にある正信偈だから、この方を『文類正信偈』と呼ぶことになっている。つまり五十二歳と七十三歳と、製作の年時に約二十年の差があるわけである。

ところがこの『正信偈』が、五十二の時のも七十三の時の御作も、ほとんど違わぬ。又違ってはならぬけれど、ほとんど同じで、儀式ごとの時これを読むのを聞かれても、普通の正信偈と変らぬと思われる程である。もしこれが世間の意見であれば、年毎に違ってくる。聖人のは信仰故何年たっても違わぬ。しかしそれでも処々違っている。それは我々でもかって雑誌の原稿を盗まれたことがあって、その時、同じことを書き直してみても、もと通りには書けない、多少は違ってくる。

その違った点を見ると、五十二歳作の『正信偈』の方には、竜樹菩薩のところが、

大乗無上の法を宣説し
歓喜地（かんぎぢ）を証して安楽に生ぜん

難行の陸路苦しきことを顕示（げんじ）して
易行の水道楽しきことを信楽（しんぎょう）せしむ

とあるのが、『文類正信偈』の方にはすこし変っていてそこが意味が深い

大乗無上の法を宣説し
歓喜地を証して安楽に生ぜん

十住毘婆沙論（びばしゃろん）を造りて
難行の嶮路を特に悲憐せしめ
易行の大道を広く開示す

となりてある。ここは窮極同じ意味であるが、文類正信偈の方が、言葉の云い廻わしの上に、頗る意味があると思うから、それを申して見ようと思うのである。

五、同行信者の思うている他力

ここを少し露骨に云うと、ここに難易の両道がある、自力他力の二門がある。今そのいずれに行こう。座禅でやろうか、他力でやろうか、どちらを取ろう。

そうした場合に、そのどちらでもと考え得ることと、誰もそう思うているのである。これは信者の人でもそうあるらしい。自力と他力とあるが、自力に行くと御開山様に叱られると、むしろ一方には行きたくても行けぬという心持であるらしい。そんな、此方の店、あちらの店と買物するような信心では、信仰の意味が徹しようはない。

しかるに他力易行ということが、言葉からがそういう気易い意味に思われて居るから、一方からは常識から考えて「人間は善くせねばならぬ、悪しくてはいかぬ。働かなくては食えぬぞ」と。それは人間の善し悪しからだと、そう考えるのが当然である。働かぬ者が働かずに食う安心をしようと云うたとて、それは出来ぬが当り前である。金が無い者が友人の所に行って「金が無くて困る」そう云うたら友人が出してくるれであろう。そんなことを考えたって、そんなこと知るものかと、言われてしまうことはきまっているのである。

六、「らくなということがあるものか」

両三年前の求道会の時に、美濃から来聴せられた方があったが、先日私の帰郷の時に母を連れて近江に行きたいとのことであったから、むしろ東京に来られるように云っておいたところが、近頃来られて話していることである。

七十になる年寄が青年と一緒に信仰問題に苦心する。しかしいよいよという所になると「それはらくじゃな」と云う。私「らくなということがあるものか」と叱る。自分が借金に困っているところに、思いがけなく親切な人が引受けてくれた。その時「それはらくじゃな」と、そんな挨拶

が出るのは、彼の人はキットそういうにきまっているとの腹があるから出る言葉である。それは他力易行ということを当然親はたすけてくれるにきまっていると考えたら、それはらくとも言えよう。「よく出来なくともよい」はらくなということになるのだから。しかしそれは慈悲の徹した言ではないと、老人をつかまえていじめて居ることである、老人も大低では無い。この間ももう帰ると云い出したのを止めて話している。

先達ても朝起きると、老人が私の家の周囲をくるくる廻っている。どうしたのかときくと「前晩安心されなかったから」と。老人もど真剣であるが、引受けて話している私もど真剣である。これは、これ程までにもして聞く人があると手引きと思うて申したのである。

そこで前にもどって難行、易行の言葉はしばらくおく。常識から考えて、我々は何処までも自らつとめ、善は為し悪は責め、借りたは返し、働かねば食えぬ。これは当り前だから常識としては、どうしてもこの方が順序となる。故に仏教においても煩悩はどこまでも断じて、自ら清らかになる。この聖道自力を外にしては、道のありようはなかったのであった。

ところがそれがすら〳〵と通れる程ならば、易行、他力は問題となるべきではなかったのである。しかるに、その当然の道をたどろうとすれば、即ち難行の陸路の困難があらわれてくる。そこで今の問題が起ってくると、こういうことになるのである。

七、頂いていると思うていた私が

ここでいきおい人生問題に移らねばならぬ。何故ならば座禅、戒行のむつかしきことを言うても、今日の人には問題にならぬから、これを人生問題におろして言う必要がある。それはどこへおろして言うべきか。矢張り私の経験で言うのが一番よい。何故なら今までの仏教に育った人の弊（へい）を云うにも、言う私がそれであったのだから。

かっても本願一実の大道の外、道は無いと云うて居った私が、内心では「この仏教を聞いて清らかな生活するのである、法のためにして身のためにしない、と云う生活をするのである。この法のために働くのである」と、この根性をもって居った。故にそういう思いで真面目にやって行くそれが宗教生活と取って居たなら、それが先に云う常識たったのである。

それでいて自分では信仰を頂いていた積りで居ったのであるが、今から思うと有難い方は軽かった。矢張り「そう頂くと謹まねばならぬ。そう思うと、このお慈悲のためには身を粉にしても、ああこう……」と、その思いの方が勝って居た。一般信者の人が「このお慈悲頂いた上はああこう……」と、それはたしなむ思いから故、気儘にしているよりはよい。しかし私は、段々それで行って「宗教のため人のためには身を捨てても惜しまぬ。学問するのも宗教のため、イヤその学問も宗教のためには捨ててやる」と、それを報恩行だと心得て、何処までも身を犠牲にしてやるつもりでやって居ったのであった。

ところが私が何程やっても人がその如くせぬ。それだけの効果が見えてこぬ。すると何だか自分一人が損をしていると思われてきて、人は勝手なものである。これでは自分一人が踏みつけられ、埋め草にされ、自分の思惑が立たぬとなってきた。すると不平たらだら、自分はこれ程正しくしているに、人がいかぬと、これが私の胸一杯になってきたのである。

八、自己主張は人間の本質

そこでこれを皆様は何処へ聞いて下されてもよい。或は家庭問題で、老人がこれほど遠慮しているのに、若い者が餘りに勝手だというのもあろう。又若い人が親が〳〵というているものもあろう。或は国際問題で、ドイツが世界を統一する使命があると信じてかかったのが、あの通りの結果に終ったもそれであるし。またそのあと始末を一身に引受けて、正義を標榜して立った米国のウイルソンが、神経衰弱にかからねばならなくなったのもそれである。それはそのはず、どの道、人間の集りの世界なのだから。

故に第一私の気のついたことは「今まで自分は正しい、正しいと、思うていた自分が、いよいよとなるとこれだけのものか。これは今まで俺が〳〵と思うておったのが悪かった」と。

ここが眼目（がんもく）の点なのである。青年の方は、或は現今労働問題、社会問題が起きているのに、そんな話は無交渉と思われるかも知れぬが、実はこれほど直接影響のある話はない。

これは私の思いであるが、私の今まで見るところによると、本来人間は、自分は正しい〳〵と、自己を何処までも主張するのが性質なのである。誰とて自分が悪いとは思わぬ。私が自分の方が正しいと主張すれば、相手も矢張り自分の方が正しいと、このように何処までも自己中心で、個人として、国家として、団体として、階級として、何処までも、自分の方がよい〳〵で……自分の方が善いとなれば、人の方が悪いとなるにきまっている。そこでよしあしの争いが起って、これが人間争闘の絶えない根源なのである。

聖徳太子『十七憲法』には

忿（いかり）を絶ち、瞋（いかり）を棄て、人のたがえるを怒らざれ。人皆心あり、心各々執るところあり。彼

是（ぜ）なるときは我非（ひ）なり。我是なるときは彼非なり。我かならずしも聖（ひじり）に非ず、彼かならずしも愚に非ず。共にこれ凡夫のみ。是非のことわり、たれかよく定むべけんや。相共に賢愚なること、環（たまわ）の端（はし）無きが如し、云々。

かくて各自に自分の方がよい〳〵と主張して、これだけは遠い昔から今日にいたるまで考えが動かぬのである。

九、『我』の人生

全体、仏教はここに根本を据えて説きたいもの、――かく人間が我慢のかたまりゆえ、これがある限り立てぬからそれを砕くのが仏教の無我なのである。こういうと「そういうお前も我が仏教で言うのだろう」と思われるかも知れぬが、これだけは私、それでない積りで言うている。

すこし云い過ぎになるが、私は、西洋思想は我（が）が折れて居ぬと思う。社会問題でも、労働問題でも、自分等の考えが正義だと主張することになって居りはせぬか。たとい思想の上からでも、宗教の上からでも、自分の思うのが正しいとなる時は、たちまちこの「我」がつく。故に仏教の人でも、言う時に我が法は、となるとハヤ法に我（が）がつく。

しかし、これは理解して貰わねばならぬ。私は今日起っている社会問題、労働問題、それをいかぬと否定するのでないから、私はそんな無我なことは云わぬのである。けれども、本来人間なるものが、何処までもこの自分を本として行く、その外に行きようが無いのが人間であるから、それ故、極端になると、今日の如き「人を食べてもよい」とようなことを言わなくてはならぬことになる。「若しそれがいやなら喰わずに死ぬ覚悟せよ」「でなければ喰う覚悟をせねば」と――で昨夜もある人がわざ〳〵神戸から聞きにきて

「それでも先生、何か人間に生れた使命というようなものがありそうなものですが……」と。私、

「いやそうだけれど、そこになると、思うていた使命も何も砕けてしまい、何もかも自分の生存のためにやっていたばかし。ここになるとむしろこれまで人に無我にしてきたことを呪わねばならぬ程である」と。

それ故に『大無量寿経』の五悪段には

「強き者は弱きを伏し、うたたあい剋賊（こくぞく）して、残害殺戮し、たがいにあい呑噬（とんぜい）す」

しかし私は、こういう方面からは気がつかなかった。むしろ何処までも自分が善くし、無我にして、たとい人に食われても不足が無い気でやって行って、それが結局、大不足に出てしまったので覚ったのである。すると、今までは捨てていたと思うていた自分、一身、さらに捨てられていない。

自分は今までこれ程して来たのに、人が認めてくれぬ、人がひどい。すると、これまでのが、人に認められたいため、たしなんで居た善であったからである、それだから人の善は面白くなく、自分の善を楽しんでいたのは、本当の善を楽しむのではなくて、自分は善をしたという名誉を楽しんでいたわけである。

これていて「自分は善くして居る〳〵」と思うて居ったのは自分が悪かったと、ここになってきたのである。

一〇、難行道なる意義

そこで、どうであろう。これが難行道、自力ということなのである。故に自力で、唯努力で行こうとしても、思うように行けぬという。それだけなのならばまだしもなのであるけれども、かく如何なる場合でも一点の不足を出さず自分を犠牲にすることが出来るなら、それは自分が善く出来たにもなろう。

けれども、今自分が善く出来たと思えば、その出来たの思いが、はやそれだけの名誉、報酬を取って満足している心なのである。すなわちそれが何処までも、与えたものなら取り返さねば承知が出来ぬ性分。それでは、人に与えたにはならぬ、ただあずけたというものである。すなわちそれほど一分一厘「我」が捨てられぬ、どこを見ても名利心利己心のかたまりの我々としれるから、その道は難行道、自力ということになるのである。

そこで、難行道は嶮しい山を行くことになるからつらい「いや山野を、跋渉（ばっしょう）するのは困難もあるが、それだけ愉快もある」と云われるかも知れぬ。けれどもものはとりよう、彼の山越えたらと思うて行ったらまたもとの山、この山越えたらと思うて行ったらまたもとの山。そこになってもう行く道がなくなってしまったのが、私の気のついたもとであった。

そこで、この時、西洋流に、自分は正義だから何処までも道を通す。正しいものは死んでも正しいと力んだなら、その時はもう死に行きつまる外無い。けれども私はその時かく自分がよいよいと思う、そのよいが自分の我慢な本性だと、問題が自分の悪しさの方に転んでいって行き詰ったのであった。

それ故、私など、これまで宗教のため骨折ってると思うて居たのは、我が宗教のためやっていたのであった。西洋人が我がキリスト教のため骨折る。我が日本、我が宗派のためにやる人のあるのは無理もない。かく宗教までが我がの範囲にはいれば、我がの一字で駄目になってしまうのである。

故に、これまで宗教のためにやると思うて居ったのは、

皆自分のためであったかと、ここで私は信仰も宗教もみな砕けてしまったのであった。

一一、老媼の求道

ここでまた話が一寸別れるが、今の美濃からきた婆さんである。このあいだから私がかく色々といじめる。老人は中々頭がよい。云うことがすこぶる明快である。

「先生はいかぬ〳〵と仰言るが、東京では極楽へ行けぬかも知れぬけれど、美濃に帰ると極楽へ行けるのだからかえる」と。

すこぶる要領を得ている。それを押えてどうしても帰えさぬ。いつか佐藤強三郎君が越後から母を連れてきて、息子の親切にほだされて信仰に入った例など持出して色々に話して聞かせる。すると老人

「ああ先生がこんなにまで留めて下され、息子がこのようにまでしてとめてくれ、息子じゃとて女房子が国許に待っているに、私のためあんなにまで言うてくれる。子供のためこのようにまでして貰って有難い〳〵」

と。その喜ぶのは偽りでない。けれどその有難いは仏と別々になって居て、聞く方に言うているので、頂いた方にはなっておらぬ。それで私「イヤ、息子がそれまでにして聞かせたがってくれる、その有難いのがお慈悲の有難いのであることに気をつけなくては」と段々話すと、今度は「先生どうか十分に〳〵」と云う。

はじめは帰りたがっており、すでに連れは飛んで帰ってしまっているのである。そこで私「このたびは息子さんが貴女の六十年来の聞き方を心配して、わざ〳〵金使って来ているのだから」と段々話して行くと、その中に「先生どうも妙なことになりました。これなりで造作せずに帰ったら、帰ってから仕末にいかぬから、何とかしませんでは」と、中々老人うまいことを云う。如何にも造作である。成る程、今まで立派に建っていた信心も極楽も、あちらがガタガタ、こちらがガタガタ、これでは住めぬから手入れしなくてはならぬ。

ところが今朝になると「今まで造作と思うておりましたが、今日は何もなくなってしまい、この位なら東京へ来ぬのでした。これでは取られにきて、空虚（からっぽ）で帰らんならぬ」と、

これが本当の声なのである。

一二、道楽者に金をやる如し

それは私が長い間、仏教のため、宗派のためと、学問も何もすべてをあげて二十年来志して来たことが、みんな、我慢のため、名利のためであったと、今までの信仰がまる砕けとなってみると、今までのが本物でないから砕けたと知れても、そうなってくると残念で〳〵思い切りがつかぬ、故に老人が惜しい〳〵と思うのはもっともなのである。それは代わりの出来るまでは、腐った家でも、代わりがなくては雨ざらしである。私が現にその通りであった。

そこになると、唯出るものは愚痴ばかし、故に今朝も、美濃の老婆に申したのである。

「それでよい。全体今まで妙なものがはいっていたからいかぬのじゃ。そういうように、居る家も何も無くなってしまい、空虚（からっぽ）の行き処のないのを哀れと言うて下さるお慈悲ぞ」

と。老人涙を流して喜んだ。そうかと思うとまたあとから惜しい〳〵と云うている。

それ程よろこんでも、矢張り今までの聞き癖、腹はすこしもふくれておらぬのである。で今朝も申した。

「道楽者に金を遣るようなものじゃ。貴方に信仰をやると、出来た〳〵と振り廻すから、金はやらぬ。金は一文もやらぬが、その身の寄せ所のない汝を、親は何処までも養い続けて行こうぞとのお慈悲じゃ」と。

これが一生懸命の話なのである。それは皆様が信仰が欲しい〳〵と、信仰の金を摑みにきておいでる。そして、自分が親に摑まれにきていることを知らぬ。摑む思いでくる故に、何時までも得られぬ〳〵になる。何ぞ知らん、その得られぬ空虚（からっぽ）が可哀想と、その者を親の方から摑もうとのお慈悲である。故にさきの『文類正信偈』の

「難行の嶮路を特に悲憐せしむ」

である。

一三、唯私の欲しかったのは

さて私はなぜ老人の話を持ち出したか。わざ〳〵美濃から信心取られにきて、もとの信仰が恋しいという、私がそれだったからである。ああ今まであの通り、修養々々と積んでおいて、こんな馬鹿なことがあるものか。今まで生命がけの苦心して打ち建てておいた信仰、それはすっかり砂上の楼閣となってしまったが、もとのままならば、自分も信仰家で居られたのである。それはいかさまの偽せ金であった故、偽せ金は駄目だと云われれば、そうだとは分るが、それでも矢張りもとが恋しい。たとえば偽物の絵でも偽物と聞いて本物と思うわけにはいかぬが、矢張りもとの本物と思うて居った時代が恋しい道理である。

その時、私は妙な心理状態があった。それは従来だと、人にほめられると喜しい。一旦まことで無かったと分ってからは、ほめられても嬉しくない。ああ自分はこんな我慢でやっているに、人はほめる、人はだまされている。人をあざむいている、自分は恐ろしいものと、こんな気持があった。

それなら人に打明けて「ウン、そうか。君はそんな人間

か。そんな名誉心、我慢でやっているのか」そういわれると「ああ言わなかったらよかったものを」と、ここが、ごまかせもせず、またごまかしたく、まことに困ったところであった。

東京に来て昔風のごまかし信心もいかず、さればとて暴露してしまっては惜しい〳〵になる。故に、そこは老人の分り難い分け。その時はあった信心がもうこわれているのだから、信心ももう頂きたくなくなる。信仰にはもうこりこりした。信仰など聞いたからこんなことになってしまったと、有難いも何も無くなってしまう。サア、そこでもう信仰でも何でもない。

さて、私の欲しかったのは、自分が人に隔てをやめ、我慢をやめ、打ち解けられればよいのであるけれども――これがすなわち難行道――それが出来ないとなれば、もう外のことは思わぬ。自分がこれ程へだてを止めようと思うても止められず、我慢を出さずにおこうと思うても、自分の力ではもうどうにもしょうがない。これ程人に打ち解けたいと思うても、どうにもならぬとして見ると、もう自分は人に棄てられ、世に入れられぬ。（そこになると自分のことの外に、もう何もないのだから）

さればといって、自分はもうこれからこれがよくなれようとは思えぬ。誰か世の中に、自分がこれ程止めよう、解けようと思うても、止められず、解けられぬに困っているところを、外の者は、こちらが隔てれば向うも隔ててくるが、誰か一人友人があって、それ程止めよう、解けようと思うても、止められぬは性分だからである。それはそういう疑い深い、我慢の強い性分と、そこを見てくれる者があって、

「あゝ、あれはあゝいう性なのである。性なれば止められぬ、止められぬが可哀想」

と、ここを私が必ず言うところなのである、それは私、心の中に「我慢は止めぬといかぬ」と必ず人が言うと思うているのである。「いかぬ」といわれれば、それは当然故どうにでもして止めるべきだが、それが止めたいにも、止まらぬとなっているのである。故にお前はその止まぬのが気の毒だと、これが欲しくてならなかったのであった。

ここは、いつもの電車道に倒れて動けぬのを哀れんで下さる例でいうと「あれは動かぬのでない、動きたいにも病気で動けぬのだから、気の毒」となるのである。故にそれがわかると「そこを見てくれたのか、有難い」となるのである。それは動けぬのが気の毒と見た上は、動けぬのをそのまますて置くということはない「よろしい自分が肩にかけて負いましょう」とか、何とか、どうしてもそうならねばならぬ。故に「歩けぬのが気の毒」と見てくれるというここが一番の急所である。

ところが、今の老人にすると、動けぬのが気の毒というそれだけでは有難くない。そんなことは普通である。もっとどうか五割増をとなっているのである。

ところが、今電車が来るのに動けぬという時に「あれは動けぬのじゃ、気の毒」と、この見て貰えた一言が有難いとこなのである。ところがこの深きお慈悲の所が、分かったようで、容易に分からぬ。ことに真宗を聞いて居ったところの人は、聞き分けねばならぬとなって、この言葉が本統と頂かれぬのである。ここを少し申さねばならぬ。

一四、私の話を多くが聞き違えておる

私の苦しんだ時の話にもどるが、私の苦しんだのは、そうなると、どうしても人に隔てがやまらぬ。その時にはもう、誰、彼なしに、誰にでも隔てるのである。

へだてられて有難い人は一人もない。此方から隔てれば向うも隔てるにきまっている。狂人が狂人の故に往来で人を撲つ、こちらは狂人でもなぐられた人は知らぬから、けしからぬというにきまっている。そこへ誰か横から「君あれは狂人だ」と知らすと「そうか、狂人か、それでは可哀想」となるかも知らぬが、人から撲たれて有難い者は一人もない。

このように私が隔てる故に、いかぬ〳〵とみんながきっとそう云うていると思っているのである。ところがその中に一人でも

「イヤ、いかぬはいかぬけれど、あれは生れつき故止まぬのじゃ。止まぬとすれば気の毒なことではないか。金つかうのはいかぬけれど、これが生れつき故、その生れつきが可哀想じゃ」と。これが親心なるものである。

ところがこれ云うと、今の老人「それはらくじゃ」と。

らくぐらいではここをこんなに言わぬでないか。それをみんながそんな聞きようしているから「このお慈悲いただいた上からは出来るだけ謹しみます」と、そんなことになっている。「謹しむと言うたって、それがあなた謹めますか」「イヤそれは謹めることもありましょうが」と、そんなことになってある。

全体、私の話をそのように聞いている人が沢山ある。「先生のは謹しめぬのが気の毒、喜べぬのが哀れとのお慈悲だから有難い」と、そんな風に徹底せずに聞いている人がいくらもある。らくなお話と思っている人がいくらもある。

一五、「働かいでもよい」はいかぬ

自分で話しながらも有難いと思うからまたしても云う。それは例の不具な子供で安心した婆さんの話である。

あのお婆さんは長いこと外へ聞きに行くと「信仰の上は

こうせねばならぬ、あゝせねばならぬ」それ云われて困っていた。ところがここへ聞きに来たら「その出来ぬのが憐れ、いかぬが可哀想」と、これ聞いて「これはらくのお説教じゃ、誰も来い、彼も来い」とみんなを連れて、それで三年間ききに来て居ったのである。ところが私の話に

「自分が困っている時に親切な人から金を貰って、マアこれで働かいでもよいではおかしいではないか。この働かいでもよいはいかぬ」

と。これを聞いてまず不審が起った。次に私が

「全体働かいでもよいは、働くことの出来る人間の言う言葉である。吾妻橋の上に行くと、沢山な乞食が金下さい金下さいというて居る。金をやると有難うというていて、人が行ってしまうと煙草飲んで居る。あれが働かいでもよいというものじゃ。働かいでもよいでは無くて、働こうにも働けぬのが可哀想だから、その働けぬのが哀れとのお慈悲である」と。

これ聞いてもう婆さん、何が何やらサッパリ分らなくなってしまった。「働けぬからあわれ、働かいでもよいではいかぬ」——家で子供に食事をさせながらも「働かいでもよいではいかぬ、働けぬが可哀想」——ここで話を聞いて表へ出ても、そればかりになっているもの故、道で着物をよごしてしまった。それほどに婆さんは非常な心配したのである。

ここ皆様わかりますか。分かった積りでも、ここは仲々分かりませぬぞ。大低が「謹もうと思うても謹めぬ、謹めぬを見て下さるから有難い」それになってしまって、分かっておらぬのである。故に真宗の信者は「働けても働かぬ」という妙なものになっている。そこはむしろ世間の働かねば食われぬの方が弊害が無い。

一六、不具の子を持った親の心

さてこのお婆さんが気がついたのは、いつも云う、隣りに七ツの時からセムシになって、からだのかがんだ子供がいる。或時、その家の前を、十六七の学校帰りの娘さん達が、手をつなぎ合って帰って行った。セムシの子供のいるのを見て、「あれ、あすこにあんな片輪が居ります」と。それを聞いていやな顔をしていた。すると娘さんたちは「あんなのが居る〳〵」と互に袖ひき、指差してのぞきこんで通って行った。子供はたまらなくなって、ワッと泣き出してしまった。これをきいた母親は、奥の方から飛んで出て、その子を抱き上げ、涙をホロ〳〵出して

「お前が片輪だから、みんなが片輪だというのじゃないか。だからお母さんがこの通りに可愛がってあげるでないか」と子供に云って、通って行く娘達に向って大声で

「生れだてからの片輪でないわい！」と。

今のお婆さん、この有様を見ていて、「成る程、私が片輪だったのである。先生が働かいでもよいは、働ける者のいうことだといわれたが、成る程自分が、働きも、喜びもならぬ不具であった。だからこの片輪が可哀想と言うて下さる親のお慈悲であったか」と。——それなのにこれを「らくな」など、らくなぐらいなら自分の片輪が分っているのでない。

又、或る人は「片論があわれと云われるときくと、よけ片輪になって、よけ可愛がられようかと思う」など、すべて他力の考え方の間違ってくるのは、ここの分かると分からぬとである。

今片輪の子の母親が、子供を可愛がって、うしろに背負い、大声あげて「生れだてからの片輪ではないわい！」生れだてからと、そうでないと、別に区別はないようでも、それほどに片輪の私のことを憐み、思うて下さる親心である。故に「難行の嶮路を特に悲憐せしむ」が仏の慈悲。その片輪の他人から指差され、笑われるばかりの、誰も相手にしてくれぬ汝故、その汝を抱きあげて何処までも〳〵捨てぬそのご真実が、これが本願一実の大道なることとなのである。

一七、特に悲憐せしむ

そこで美濃からきた御老人に一言する。

「貴女、信仰上の片輪になって帰るのが残念だ〳〵と云うが、私も信仰上の片輪になって、その私の片輪を哀れに思うぞとの仏の大悲を聞いて安心したのである。それを貴女は、ただ可哀想だけでは困る、善くして下さらなくては。この根性があるから、不具になったのを残念に思うのであるが、その片輪の貴女をそれ程に思うて下さるお慈悲をきけば、その貴女の片輪をそれ程までに見て下された、それが有難いのでないか」

それが易行の大道ということなのである。すると何だか世間には、随分立派な人もあるように思えるも、仏の眼よりは一切衆生がみな片輪。一切衆生悉有仏性（しつうぶっしょう）という上よりは、何だか一切衆生が皆自分で仏になれるように思えるが、それは間違いである。何処までも人に呆れられる片輪の者を、その片輪に生れついたが可哀想故、どこまでも捨てぬぞ、呆れぬぞ。この御真実には如何なる片輪者も救われぬ者はないから、一切衆生悉有仏性なのである。即ちそれ程まで見て下さるお慈悲の下には、如何なる片輪者も腹ふくれて、誰一人見てくれない私なるも、このお慈悲一つに生きるのである。即ち信仰とはこの片輪者が仏のお慈悲一つに生きるのである。

ところが片輪者は片輪ではいけぬと思うているのである。ところが、そのいけぬのが可哀想ゆえ、そのいけぬの

を殊に遣る瀬なく思召す。即ちそれが「難行の陸路を特に悲憐せしむ」である。難行道ではいけぬから、いけぬところを特に見て下されたお慈悲である。すなわち、それが「易行の大道を広く開示す」である。そこは『歎異鈔』九章に

「なごりおしくおもえども、娑婆の縁つきて、ちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきこころなきものを、ことにあわれみ給う」

とか、

「仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしく覚ゆるなり」

とか。あるいは

「弥陀の五却思惟の願をよくくく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」

とか。この片輪を特に憐みて見捨てぬとの御真実一つがありがたいとなるのである。

——求道大正八年十一月——

病中吟

北岡行男

載せられて　救急車上　五月闇
かく死ぬと思はざりけり　露涼し
生涯の不具となるやも　梅雨を病む
死の不安なしとは言はず　明け易く
短夜や　両の腕の動かざる
握り合うなえしわが指　灯虫の夜
仰向いてなえし掌合す　灯涼し
短夜や　命天にあり　さりながら
妻に依る試歩の廊下の梅雨じめり
人情厚しと識りぬ　梅雨を病み
梅雨あけて藪を透き洩る日射かな
浜木綿の大きかりける院の夜

我生きてあり　秋雲流れゆく
見上げたり今朝現れし鰯雲
首枷（かせ）をはずせし今朝や鰯雲

——白浜温泉病院にて——

近角常観の生涯

木村雄吉

近角常観という人は、私の師であるとともに私の岳父でもあることのためか、筆を執って間合いを定めるのに一種の抵抗を感じる。

が、また思い返してみると、私が求道学舎の一舎生として接した時と、家庭内の一員として接触したあととに、切れ目の一線が感ぜられなかったことが、私の姿勢をととのえてくれるようである。

この人の人生生活の大半は、求道会館を基点として世の中に開かれてあり、そのいわば私生活は、青年達と起居を共にした求道学舎に開かれていたと思われる。

「愛山護法」の願い

ひとりの人の生涯を短い言葉で特色づけることは困難なことであるけれども、近角常観という人の生涯は「愛山護法」（あいざんごほう）の願いによって貫かれていたということができるかもしれない。むろん「愛山」とは「一宗の繁昌と申すは、人の多くあつまり、威の大いなる事にてはなく候」の意味であり、そのことが「護法」と表裏する意味においてであったことに間違いはない。近角常観の「ただひとたび」の廻心（えしん）は、実に「愛山護法」の理想を機縁として開発せられるのである。

明治四年四月二十四日、滋賀県東浅井郡朝日村字延勝寺（現、湖北町）の大谷派西源寺に生れる。父は常随、母はユキエ。やがて京都東本願寺経営の教校に学ぶ。ここで先達清沢満之の声咳（せいがい）に接する。明治二十二年七月、東本願寺留学生（内地）として上京、第一高等学校を経て、東京帝国大学哲学科を卒業、三十一年夏である。この間、明治二十七年七月以降、清沢らを中心とする所謂「白川党」事件の勃発するにあたって、学生常観はこの「愛山護法」運動に挺身することとなる。

巌頭に立つ青年常観

白川党決起の事情に触れる暇はないけれども、詮ずるところ、教団の主導者が、教団の外殻に係わる宗務、財政の

ことに執して政治的官僚主義に陥り、祖師親鸞の真精神を忘却しつつあることに対する弾劾（だんがい）と改革を迫る理想主義的思想運動とみることができよう。

この運動は深い意味を蔵するけれども、相対有限の人間界では、理想はただちに現実ではない。明治三十年春、白川党は一応解消するに及んで、近角は学業に復帰すべく帰京する。が、おそらくいうべからざる空虚感乃至挫折感（ざせつかん）がこの青年の胸に流れていたのではなかったろうか。のみならず、早く運動を離脱し帰京したかっての同志は、各自学業に励みつつあって、彼の苦闘を評価し労（ねぎ）ろう者もない。人心は期待に反して冷淡である。挫折感は知らぬ間に不満感にも転じ、三転して人をうらみ世を呪う心をも生む。この種の疎外感（そがいかん）には、しかし、まだ一縷の慰めが存する。なぜなら、非は彼であって我は是（ぜ）、この立場に一時の逃れを見出しうるからである。けれども、真実を願う青年常観の精神は、このような境に滞留することを許すものではなかった。

そもそも「愛山護法」運動に挺身したのは、如何なる意味の報酬（ほうしゅう）をも期待してのことではなかったはずである。ところが現実の疎外感は満足を他に要求していることに他ならない。真実を求めたものの正体が、実は、不実の巣窟であることが見出されてくる。この自分こそが問題の核心であってみれば、もはや逃れる道もない。

「わが臨終は近づけり、わが命はすでに死せり、且っ精神的に人より殺されつつあるにかかわらず、なお菩提心の起らぬは何事ぞ、汝自殺せんと欲せばすべからく男らしくこれを行え、しかして自殺して何れの処に往くや」

しかも、死するとも問題そのものは未決のままに遺されるだけである。ここに至って、青年常観は絶対絶命の巌頭に立っこととなる。

精神的轉回の機縁

狂乱のような苦悩の青年は、夏の帰省において、逐に筋炎の病に臥す。しかし不思議にも、如来大悲の無碍光（むげこう）がこの青年の胸を射す機縁が熟するのである。手術後の通院の帰路、

「車上ながら虚空を望み見た時、にわかに気が晴れてきた。これまでは心が豆粒の如く小さくあったのが、この時胸が大いに開けて、白雲の間、青空の中に、吸い込まれる如く思われた」

精神的転回の光景は心理的描写にたえるとしても、それに尽くされるものではない。苦悩のはてに近角が最後に求めたものは、この苦喪を限なく理解し、しかも満腔の同情をもって見捨てない親友であったが、それこそ仏陀その人であったとしみじみと感得するのである。

人生至高（しこう）の価値は、如来大悲の無碍光、無対光、超日月光、南無阿弥陀仏である。この一切価値の転機によってこそ実人生に秩序世界が建現すべき筈である。「愛山護法」の願いを機縁として、青年常観は廻心に導かれるのである。ここに近角常観の真人生が始まったとみられる。

その後の近角の生涯は、南無阿弥陀仏の一道に貫かれて展開する。西洋の宗教事情視察のためのヨーロッパ留学をはじめとして、三度におよぶ宗教法案問題、巣鴨監獄教誨師問題、ローマ法王使節交換問題、三教合同問題等、すべて、国家と宗教の関係は如何にあるべきものかを、絶対他力信仰の上から為政者に対して忠言を呈し、有縁の人々を教化しようと試みたのである。その後も求道会館、求道学舎に力を尽す。「会館学舎幾経営」であり、すべては「厳ク守ル南無六字城」だったのである。殊に青年を愛し、青年に期待し青年に信仰の徹底を希うこと切実であった。

種樹有生香　　群芳聚一堂
至心何不得　　延寿向朝陽

昭和十年六月一日、求道学舎第三十四回記念日における感懐である。

最後の最後まで

しかし、近角常観は生涯の最後の場面において、再び「愛山護法」のために立たなければならない。祖師親鸞冥々の計いによるものか。問題は、句仏上人僧籍剝奪（はくだつ）問題としてその姿を現わす。この王舎城悲劇の解決は何か。老常観にとってはその解答はもはや明らかである。我も人も仏陀絶対の慈愛と真実に南無して、祖師親鸞の真精神にひれ伏すことである。そこに人間相対界にも自然（じねん）の秩序が建現せらるべき筈である。本願寺教団の自然の姿はここに存する。ただし、これと同根の問題は、あるいは今後も千変万化の姿をとって現われるかもしれない。が、それらは保守、革新の問題でもなく、進歩、民主の問題でもない。これらの観念は問題的世俗世界の相対概念に過ぎなく、畢竟、霊界永遠の南無六字に摂取せらるべきはずのものである。近角常観は最後の「愛山護法」に命をかけて、全国に信念を披瀝するが、逐に脳出血に斃れる。昭和六年十一月三十日である。

爾後十年、不随の身を信仰に支えて布教を止めない。また「信界建現」を発刊して、感慨をこめて「歎異鈔愚註」の筆を執る。露命枯草にかかった身を、先達唯円に擬する姿に見られた。

昭和十三年九月、長男文常はすでに中支那の野戦に消え大平洋戦争の悲劇はもはや避けがたく見えた昭和十六年十二月三日未明「愛山護法」の人、求道院釈常観はその生涯を閉じる。行年七十一歳。（東京本願寺報九十九号より）

近角常観・常音先生随聞記

柳瀬留治

（一）

歳月の流れるのは夢のようである。両先生を思うにつけ、御生前講話の上で常々繰返して申された幾つかのお言葉がありありと浮んで来るのである。常観先生は大砲なら、御弟の常音先生は機関銃をもって我々の自我、我情の城を破って下されるのであった。両先生のお言葉は一一信仰の体験を通じてのお言葉で御自身が人生苦悩の極に、仏の大悲に救われなされたよろこび、そのほとばしり出たもので、言々言葉というより力のほとばしりであった。救われるとは力に引き揚げられるのだということをつくづく感じるのである。

両先生のお言葉はまことに御自身の救われた仏の大願業力そのものが口を突いてあらわれたもので、そのお力に我々我執の胄が打破られて先生のお言葉にしたがい、多くの方が入信された様子である。

我々は一度、安心させていただきよろこんでも、しばしば元に陥り、今日はここを何おうと思ってまいり、先生のよろこびにあふれるお顔に接すると、困っていた自己の迷妄がたちまち消え去って取り立ててお聞きすることがいらなくなり、雲が吹き払われた空のように何の障碍もなく広大な光の満ちた心になって帰ったものである。

先生にお目にかかるとお心からじかに電波のように伝わってくる、「君達のもやもやした心は百も承知の上の広大なお慈悲だ」といったいつくしみの笑顔に、私共の小さな霜柱がめらめらと消えるのである。先生のお言葉は、言葉というより力をじかに突き付けられるもので、廻りくどい説明でなく、火とはこれだと火を突きつけたら皆さんは熱いというであろう、仏はその火である。如何なるものをも焼き尽くす火である。俺は鉄だと威張っていても、焼き融かさずばやまない、私の如き煩悩強情の身も参りましたと胄を脱いで謝（あやま）る外はないと仰言った。その短刀直入なお話は先生の心の火を直ぐさまおっ付けられた気が

するのである。

常観先生の晩年は病気で体が弱られ、語気も低くなられたが、四十代から五十代の頃は情熱の籠った御講話で、言葉というより信力が語気語勢をもって我々の心にじかにとび込もうとするものだった。従って言葉も先生の体験から出る独自な言葉が多く、その著しいものは、どこまでも五分五分のやまず苦しんでいる私共を、飽く迄五分五分を離れた広大なおこころで可哀想に思って下される。その五分五分と可哀想のお言葉は、一席のお話に必ず繰返されるのである。

「我々誰しも五分五分の心を持っていて、人生上それに苦しむ。善い者は愛され、悪い者は嫌われあきれられる私は学生の頃、朝道で先生に礼をし、先生がそれに応じて礼をしてくれないと何か私のことを悪く思っているのではないかと心を廻した。先生にあとできくと、そんなことがあったかなあとの話をされることがあった。又電車で持っ吊革がなく、吊革を譲ってもらうと、その人は一っしか持っていぬのを譲ったことが判り、誠に失礼しましたというと、いや人生はあいみたがいです、といわれ、そした五分五分の私が五分五分ならざる人にあうことがある。私はすこしでもよいことができたら、喜べたら、念仏が称えられたら、と思うが、仏の大きな慈悲の前には、たとえ蠟燭の灯も、電灯も、太陽の光の前には役に立たぬと同じで、小さな光をたよりにしているものを憐れみ給う仏のみ心の前には、暗くて困ると嘆いていたものも、明るさを誇っていた電灯も、全く何の役にもたたない。のみならずそした我々をあきれ給わぬお慈悲である」

との言葉、私など永い間信ずるから救われる様に思い、喜べるのがよくて、喜べぬのが悪い、と思い、救われるのは、救われる丈の資格がなくてはなるまいと、五分五分の考えから離れられずにいた。又、常音先生からは

「救われる値打など永劫に出ない。それをやがて出るものかの様に思っている。まだ駄目ですと払いのけている

それで永劫流転するのだ」

といわれて漸く判ったのである。

我々は飽くまで五分五分の考えがこびり付いているためにただの念仏だといわれるただが判らず、かく喜べぬものだから、かく黒闇のものだから、浅ましい心のやまないものだから、憐れで見捨てられぬ、という桁（けた）はずれなお慈悲が判らなかったのである。超世の本願といわれるが本当にこんな桁はずれのことは世にあるものと思っていなかった。誠に不思議という他ないと思う。又常観先生は

「この駄目なものを、しようのないものを、可哀想に思

い、憐れに思い、どこどこまでもお見捨て給わぬのだ、親は満足な子供より片輪の子、出来の悪い子、道楽な子は、よけいに捨てて置けぬ」

と声をからして仰言る。そしてよく背虫の子を持った母の入信を語られた。

「或る日、背虫の子供が戸口に出て、小学校の遠足を見ていた。生徒たちは口口にあれあの背虫の子よ、と指して通った。子供はわっと泣き出した。それを見た親は思わずとび出て、この子だって生れ付きの片輪ではありませんよ。成りたくて成ったのではありません、人の子供の悪口はいって貰いますまい」

と、その子を掻き抱き千万無量の思いで家の中へ入った爾来その母親はそのことが寝ても覚めても心の悩みとなり仕て見ようがありませんと訴えた。

先生は、「その仕て見ようのない子供、そのあなた、そした宿業を持って悩み苦しむあなたの仕て見ようのない心底を汲みとり、現にかく仏が憐れに思し召して唱えよとのこの念仏ではないか」と申されるや、その母は「仏とはそした方であったか」と喜ばれた。

この話は何十回と申されたお話であった。

先生はまたよく刑期を終えた釈放者の話をされた。

「善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや。親の心からすると、出来のよい子も可愛いが、出来の悪い子はよけい心配でたまらない。刑期終わるや、即刻親の許に帰って来いと、親が云うのであるが、子はすこし面目が立つようになったら、手土産が出来たら、成功したら帰りましようと云って、帰らない。親は。手土産だの、成功だの、それこそお前には泥棒でもしてするより外ないであろう、碌なことの出来るお前ではない、汚名のまま直ぐ帰って来い、心配でたまらないと親は待っている。親心はこれである」

と説かれた。誠に仏が我々の碌なことの出来ぬことを知り抜いて、唯の念仏だと仰せられるのに、喜べたら、信じられたら、仰せに従いましようと云っているのである。誠に仏に対し五分五分でいるのである。我々の喜びと申すと、救われたからの喜びで、功利に基づく感傷に過ぎず、直ぐ消えてしまう喜びである。私共の救われる資格は罪悪深重煩悩熾盛、それが可哀想で見捨てられぬとの大願業力一つだけである。我々碌な持物はないのみでなく、一つも役に立たぬもので、泥棒の持金と大差はない。

又常音先生は

「念仏とて仏からの貰い物で、碌な物を持たず、空虚でして見様がないので下された物である。人生何物も腹を満たすものがなく、飢えに悩んでいる私に、唯この念仏

だと与えて下された食べ物である。いわば仏を食べて生きている私共である」

とよく仰言った。

「われは蛇に生れつき、蛙を呑むより仕方のない人間でありながら、三尺の蛇が何とか二尺になろうと善を勤めたがるが、三尺の蛇はどうして見ても三尺の蛇だ。蛙を呑まずにいられない醜い蛇をあわれに思し召して、お前が可哀想だ、わしが呑まれて遣ろうと現われて下されたのが仏だ。まことに仏を食べて生きている我々なのである。ただ誇りとするところはお慈悲の辺際なき広大なこと一つである」

と。それにつけて更に思い出すことは、常観先生のよくなされた、お粥（かゆ）のお話である。

「高野の明遍僧都（みょうへんそうず）が夢の中で、天王寺の山門の前で、多くの乞食や病人に粥を煮て食べさせている一人の僧がある。それを見た明遍僧都は、何と不思議な尊い僧であろう。あの僧は何誰か、と傍の人にたずねたところ『あれは吉水の法然上人である』とこたえた。僧都は、夢ながら、かねて念仏一つを勧める法然の教はかたよっているとさげすんでいたが、如何にも重病人の固い飯の喉を通らぬものにとっては、かく容易く、すらすらと喉を通る粥より外はない。かねて法然上人が唯念仏せよ、と勧めていられる事はいかにもそれであったかと、感に打たれて夢が覚めた。誠に固いものの喉を通らなくなった我々重病人である。それをあわれみ与え給うのが念仏の粥である。粥がつまらないで、しようことなしに食べているが、それは無上甚深（じんじん）の功徳を籠めて作った粥である。まずいだろうが食べてくれとの仏のお心である。何物も喉を通らぬ私に、何と深いお心ではないか」

と先生は涙ながらに申されたことがあった。

（二）

私がまだ若く、信仰がわからず迷っていた頃であった。日曜講話で常観先生が

「いつまでもやがてそのうちに、と将来へ逃げてばかり聞いていては駄目である。法を聞く時は、わが身の現在で聞くべきである。今現在信じられず、有難く念仏の称えられぬ者が、何時までたっても信じられ、有り難い心の起こる筈はない。やがて〳〵と将来へ逃げるのは心の迷いで、それで我々は曠劫より流転し来り、出離の縁がないのである」

と仰言ったので驚いたことであった。

「我が身の現在で聞け」の一言は、我々が自力をたのんで、今にすこしは本気で聞けるようにもなろうか、いよい

よどうにもならなくなったらとか、仏の真実がすこし判ったらとか云って逃げる私に打たれた釘のように今もおもわれるのである。

自分自身を持ち悩んでいる癖に「お前の力ではとてもたすかる道はない。仏の御力にまかせよ」と言われれば、今に何とかなりそうな安念が出、我執が出て、任せきれず逃げるのである。

また、我々が仏を信じようとしている心、それが仏に随順しようとする心だと思っていたところ、先生は

「それは仏の仰せを聞くのでなく、自分自身の思わくを仏に求めているのである。

安心がしたいの、喜びたいの、有難く念仏が称えたいのと、結局自分の欲念を満たし、自分が楽に、都合よくなりたいのでないか。自分の胸がこんなに空虚で仕様がありません、これを満たして下さいと、胸にもつ欲念の空虚な袋に、何かありがたいものを恵んでいただきたいといっているのである。

仏は、それは汝の生れつきの空虚さで、底知れぬ貪欲である。その逐げられないでいるのが可哀想だ、それに悩んでいるのが憐れで放っておけないとのお慈悲であってあだかも我々が空虚な袋を開いて、これにありがたいものを入れて下さいと求めている。ところが仏は、その袋の底の外側から、それだから可哀想だと、袋を裏返しに入って下されるのである。欲しいものが得られたのではなく、得られないのが憐れだとのお慈悲が、思いかけぬまるきり反対の方向から入って下されたのである」

と、袋のたとへをもって、袋の底から、手を突込む仕草をもって、お話して下されるのであった。

私共が今まで。信仰心だと思い、仏を拝む心、それを菩提心とまでは思わぬけれども、殊勝な仏教心のように思っていたが、それは、空虚な心を満たし、やすらかな心になりたいという欲念でしかなく、世の中で満たされない腹を仏によって満たそうという欲念の外なかったのである。

「かねて仏は、汝等にそうした心以外に何があるか、世において満たされず、ひもじくて困っている汝である。この念仏の粥を食べよ、との仰せなのである」

と話された。

今まで信じられたら、喜べたらいただきましょうと、資格が出来て念仏の粥がいただけるように思っていたことは大間違いである。資格がないから下されるお粥である。これなくば万劫に食べられず、飢え死にするより外のない私でした。資格がないから下される、何と不思議なお慈悲でしようか。

常観先生はよく仰言ったことである。

「私は、蛙を呑まねば生きられぬ蛇なんだ。蛙を呑むと人に憎まれて打ち殺されるのだ。この者に、これを食べて飢をしのげとの念仏の粥は、仏のからだだ。われわれは仏を食って生きているのだ」

と、碌なことの出来ないわれわれである。称える念仏だけが善行であるはずがないわけである。仏のからだを食べて生きているのである。余り誇りになる事でもないと思うのである。

自分が浅ましいとか、悪いとかと云うことは、何か手本になるもの、照らし出すものがないと判らぬのでないかと思うのである。今の若い世代の人達は、自分が身勝手だとか、浅ましいとかいう罪悪観といったものをあまり感じないようである。大体に人間も一つの生物で、生きるためには、おのれを省みるなどしていては生きられない。それは弱者の劣等意識だ、喰うか喰われるかのはげしい現実生活だ。という風に、大体は生物学的な考えが元になっているようである。

でも真面目に生きようとしている人は、おのれを省み、自分の力のなさ、欠陥、空虚さ、利己的なことを感じていられると思うのである。ことに信仰に縁の深い方は、生活上行き詰った時、一応抵抗をもって宗教に気がつくようである。求道会館のお話を聞きに見える方々でもそのようであった。先生のお話を正面から反撥されぬまでも、心に素直に聞けず、先生にも、又仏にも立てつく心が起る。それだけに逆い、歯向うものを、悪いと思召さず、ことに憐れで可哀想で捨てられぬとの仰せに気付かれ、ひとしおおよろこびになる有様を見たことであった。

無窮堂独語

文字を目に見、おぼゆる事ならざれども、聖人の本意を能く得心して、我心の鏡とするを心にて心を読むと申し候真実の読書なり。

心の会得なく、只目にて文字を見、おぼゆるばかりなるをば、眼にて文字を読むと申して真実の読書にあらず。

わが眼にて書物を読むことならざれども、聖経、賢伝を深く信仰して読み覚えたる人に講義させ、その本意を能く得心して、我心持、身の行いの鏡とする故、俗学の書物を読み申すより一層まさりたる書物読みにて候えば、賤男賤女も書物を読まずして読むにて候。

今時流行る俗学は、書物を読みて読まざるにて候。かようの極意、よくよく体認あるべし。

（中江藤樹翁問答）

あとがき

静かな秋空となりましたが、国内は安保問題と大学の紛争で騒然としております。この胎動をへて日本人の一人々々が真剣に考え、日本の進むべき妥当な道のあらわれることを祈念してやみません。

こうした時、近角先生の御忌月も近づきましたので先生の特輯号を発行いたしました。先生から仏心の真実を聞かせて頂き、無明の大夜に大いなる灯炬をいただき、身にもつ罪業の重さにくじけず、実業家は実業の場で、教育者、政治家、農業者等々、それぞれの場におちついて、無理のない自然の大道を辿らせて頂きましょう。

ことに今回は、求道学舎の木村雄吉先生（近角先生の女婿）から貴重な原稿を頂きました。これは東本願寺報にのせられたものでありますが、転載させて頂きました。

又、生涯を近角両先生の慈育に托していられます柳瀬留治先生から、随聞記を頂きました。これは先生の近著、人生随想の中に誌されたものであります。近角両先生の直々のお育てをうけられた方々も老域に達せられて、次々と浄土に還えられます今日、残る私共にとりましては、近角先生の実語をお聞かせ頂けることは、こうした方々の念力によるのであります。

御案内

時、毎月第二日曜、午後一時。

所、京都市右京区山田開町、浄住寺

「**静坐と仏教講話の会**」

人、榊原徳草師、、主催。

御案内

毎月第一、二、三日曜午后一時半、　一道会例会

市電、新郊通り一丁目下軍、

東入ル三筋目左入ル二軒目。

○

毎月二十四日、午前午后、昭和区小桜町。　法話会。教西寺、

市バス、北山町下車、東半丁。

市電、御器所通り下軍。

定価　半年　二百五十円（送共）
一年　五百円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫　電話八三一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　吉野穂志郎
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七

慈光第二十一巻第十号　昭和四十四年十一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年十一月二十三日第三種郵便物認可